

|      |                     |
|------|---------------------|
| タイトル | 筑前国志賀白水郎歌群：構造論の展望   |
| 著者   | 村山，出                |
| 引用   | 北海学園大学人文論集，7：A1-A19 |
| 発行日  | 1996-10-31          |

# 筑前国志賀白水郎歌群

## ——構造論の展望——

村山 出

### 一 はじめに

山上憶良の作品の考察にあたり、彼の作を確認しようとする時、憶良の署名がないとか、作者に異伝をとまうとか、作者未詳の歌と類歌関係があるなど、いくつかの問題がある。

どこまで憶良の作と認定することが可能か、困難を覚える一例が『万葉集』巻十六所収の「筑前国志賀白水郎歌十首」である。

まず現行諸本を代表する西本願寺本『万葉集』に拠って書き下ろし文を掲げ、叙述の便宜上各歌に番号を附し、原文を併記することにした。

#### 筑前の国の志賀の白水郎の歌十首

①大君の遣はさなくにさかしらに行きし荒雄ら沖に袖振る

(巻16・三八六〇)

王之 不遣尔 情進尔 行之荒雄良 奥尔袖振

②荒雄らを来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待てど来まき  
ず (三八六一)

荒雄良乎 将来可不来可等 飯盛而 門尔出立 雖待来不  
座

③志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすがの山と見つつ偲はむ  
(三八六二)

志賀乃山 痛勿伐 荒雄良我 余須可乃山跡 見管将偲  
④荒雄らが行きにし日より志賀の海人の大浦田沼は寂しくもあ  
るか (三八六三)

荒雄良我 去尔之日従 志賀乃安麻乃 大浦田沼者 不楽  
有哉

⑤官こそさしても遣らめさかしらに行きし荒雄ら波に袖振る

(三八六四)

官許曾 指弓毛遣米 情出尔 行之荒雄良 波尔袖振

⑥荒雄らは妻子が業をば思はずる年の八年を待てど来まさず

(三八六五)

荒雄良者 妻子之産業乎波 不念呂 年之八歳乎 待騰来

不座

⑦沖つ鳥鴨といふ船の帰り来ば也良の崎守早く告げこそ

(三八六六)

奥鳥 鴨云船之 還来者 也良乃埼守 早告許曾

⑧沖つ鳥鴨といふ船は也良の崎廻みて漕ぎ来と聞こえ来ぬかも

(三八六七)

奥鳥 鴨云舟者 也良乃埼 多未弓榜来跡 所聞許奴可聞

⑨沖行くや赤ら小舟につと遣らばけだし人見て開き見むかも

(三八六八)

奥去哉 赤羅小船尔 褰遣者 若人見而 解披見鴨

⑩大船に小舟引き添へ潜くとも志賀の荒雄に潜き逢はめやも

(三八六九)

大船尔 小船引副 可豆久登毛 志賀乃荒雄尔 潜将相八

方

右は、神龜年中に、大宰府、筑前の国宗像の郡の百姓、

宗形部津麻呂を差して、対馬送粮の船の舵師に宛つ。時

に、津麻呂、滓屋の郡志賀の村の白水郎、荒雄がもとに

詣りて、語りて曰はく、「我小事有り。けだし許さじか」

といふ。荒雄答へて曰はく、「我郡を異にすといへども、

船を同じくすること、日久し。志は兄弟より篤く、殉死

することありとも、あにまた辞びめや」といふ。津麻呂

曰はく、「府の官、我を差して、対馬送粮の船の舵師に宛

てたれど、容齒衰老し、海路にあへず。ことさらに来り

て祇候す。願はくは、相替ることを垂れよ」といふ。こ

こに、荒雄許諾し、つひにその事に従ふ。肥前の国松浦

の県的美禰良久の崎より船を発だし、ただに対馬をさし

て海を渡る。すなはちたちまちに天暗冥く、暴風は雨を

交へ、つひに順風なく、海中に沈み没りぬ。これにより

て、妻子ども憤慕にあへずして、この歌を裁作る。或い

は、筑前の国の守、山上憶良臣、妻子が傷みに悲感しび、

志を述べてこの歌を作るといふ。

この作品は民衆性も指摘され、歌群の成立に憶良がどのよう  
に関与したかもつまびらかでなく、さらに歌群の構造の問題も  
からみ、説明を至難なものにしている。

作者について、左注に「妻子ども憤慕にあへずして、この歌を裁作る」とあるが、「或いは、筑前の国の守、山上憶良臣、妻子が傷みに悲感しび、志を述べてこの歌を作るといふ」ともあり、海難事故で没した白水郎の妻子の作とも、憶良の作とも伝えられるというほどの関与であるという。憶良の作品には、民衆になり代わった「熊凝のためにその志を述ぶる歌に敬和する六首」（巻5・八八六～八九一）のように、当事者の立場で創作した例が少なからず、この場合も同様に考えてよいように思われるが、十首の作者を憶良と考える論の中にも、否定的に考える論の中にも、十首の配列の構造を根拠とする例があるように、作者を明らかにすることと不可分に十首の配列をどう把握するかという問題があつて、簡単に結論を出すわけにはいかない。

十首の配列に何らかの構造が認められるのか、それとも意図的な構造は認められないのか。どういふ条件を備えるならば構造が認められるのか。また西本願寺本『万葉集』（以下、現行本）の他に、尼崎本『万葉集』頭注の朱筆書き入れの或本（以下、尼崎本朱注或本）は異なる配列を示すがこれをどう理解するか、などが論点となっている。

小稿では、「筑前国志賀白水郎歌十首」の配列をめぐる代表的な諸説を展望し、その論点を確認したいと思う。

## 二 現行本による構造論

戦後の憶良の再評価にともない、民衆とのかかわりが窺われるこの歌群を正面から取り上げた、いわば構造論の起点ともいふべき論は、笠井清氏の「筑前国志賀白水郎歌十首の真意」（『国語と国文学』昭和25年2月）であつた。

笠井氏は、井上通泰氏（『万葉集新考』）、松岡静雄氏（『有由縁歌と防人歌』）、高木市之助氏（『万葉集総釈第八』）、後に現行本の配列に戻られた）が、作品の内容から現行本の配列の順序をそれぞれ変更して考察されたのに対し、恣意的な変更を批判する立場から現行本の配列を尊重する態度をとられた。これは志賀白水郎歌群研究史にとって、基点となる態度として評価できよう。

笠井氏は現行本の十首の構造を、①と②、③と④、⑤と⑥、⑦と⑧、⑨と⑩の二首ずつ五聯からなり、各奇数番号の歌は夫（荒雄）の方に重点がおかれて、希望念願が基調をなしてやや樂觀的に詠ぜられ、各偶数番号の歌は自分（妻）の方に重点がおかれて、怨恨失望の悲観哀傷の方が強く詠ぜられており、対立的な五組の繰り返しにより、一進一退次第次第に、肯定は否定へ、樂觀は悲観へ、希望は失望へ、明は暗へ、有は無へと移り行きつつ、夫を偲び自らを嘆く連綿として尽きぬ怨恨悲嘆を

詠じたものと捉えられた。

そしてこの十首を憶良の創作と考えられ、その根拠に、(1)憶良が好んで他人の心になり代って創作すること、(2)左注が憶良の漢文に近似すること、(3)歌の表現に憶良の特徴が見られること、(4)「かうした特殊な構成の連作は、憶良以外の何人も敢えて企て得ない」ことなどをあげられ、十首に憶良の他作品に通じる創作態度と、配列に憶良ならではの構造を指摘されたのであった。

これに対して、(1)作者、(2)配列順序、(3)構造をめぐって異論が出され、さらに論者間で相互批判が展開された。

笠井氏の論に対して、釜田喜三郎氏は「筑前国志賀白水郎歌十首異見」(関西大『国文学』1、昭和25年5月)で、十首の配列については①～④の四首と⑤～⑩の六首とがそれぞれ一群をなして呼応すると見られ、そのうち①～④の四首は筑前守憶良が管内巡視の際に現地で採収した荒雄の妻子等の歌で、それに対して⑤～⑩の六首は深い同情と哀悼の意を表して憶良が唱和したものと推定されたが、他方で、憶良が採収した素材によって十首全部を詠んだ場合もあり得ると想定され、その場合は①～④は憶良が妻子になり代わって詠み、⑤～⑩はそれに唱和させたもの、即ち前後二聯の構成からなると考えられた。

釜田氏は十首の構造を、四首と六首の二群(二聯)と把握され、妻子等の詠四首と憶良唱和六首か、或いは憶良による妻子等の代作と憶良自身の作との唱和を想定され、ここに憶良の代作という視点が加わった。

ついで福田良輔氏は「筑前国志賀白水郎歌十首の作者の複数性について——表現形式と伝誦性とを中心に——」(『文学研究』昭和28年8月)で、歌群を①～④の四首と⑤～⑧の四首に、反歌的役割の⑨⑩の二首を付加した十首一連の連作と見られ、すべてを連作の構成者による調整と認められたが、十首を憶良の純粋な創作と見ることは躊躇され、その点については「志賀白水郎歌十首の歌謡性——憶良の単独創作説を疑ふ——」(『語文研究』第4・5号、昭和31年10月)で、『三代実録』貞観十八年正月二十五日の記事「貞観十六年大宰府言、香椎廟宮毎年春秋祭日、志賀嶋白水郎男十人女十人奏『風俗楽』」にもとづき、志賀白水郎歌十首の連作をこのような歌謡の一つとして把握しようとする視点を示されて、「恐らく、志賀の白水郎の集団に歌謡として存在してゐたものに、憶良の手が加はつて(憶良創作の歌も交つてゐるかも知れない)、現存の配列順序(尼崎本のみは異なる)となつた」という見方をとられた。

福田氏は十首の構造を四首、四首、それに反歌的二首を一連

のものと見られ、憶良創作説を否定されて、志賀白水郎による集団歌謡と憶良の関与へと視野を拡げられた。ただ、当面問題にしている志賀白水郎歌群と、『三代実録』に述べる志賀島白水郎の風俗楽を結びつけることには慎重であるべきだろう。志賀白水郎歌群は内容的に特定の悲劇的事件に結びついた歌であつて、毎年の春秋の祭日に奉納される風俗楽にふさわしいと言えないからである。しかし、志賀白水郎歌群の唱演法が志賀白水郎の集団歌謡の演奏法にかかわりがあるのではないかと着眼された最初の論として注目される。この視点から追求される論は少ないが、渡瀬氏が批判的に発展された論については後述する。

福田氏の論までに、作者について、憶良、白水郎の妻子、憶良による妻子の代作、白水郎の集団歌謡、集団歌謡への憶良の関与など、考えうる場合がほぼ出尽くしたといつてよい。

さらに、笠井・釜田・福田諸氏について、現行本の配列に構造を認められるのは犬養孝氏で、「筑前国志賀白水郎歌」論——特にその心情表現の構成について——（『国語と国文学』昭和27年1・2月、後に『万葉の風土』昭和31年、所収）において、十首を①～④の四首、⑤～⑧の四首、⑨⑩の二首の三歌群と把握されるところは福田氏と等しいが、それらを心情表現の展開として①～④を第一波、⑤～⑧を第二波、⑨⑩を第三波と見られ、

第一波と第二波では「緊密に呼応して間然する所なき心理発展の必然が語」られ、第二波の四首⑤～⑧の「心情表現の展開も、第一波（①～④）と同じく、海洋に、本郷に、更に海洋に、更に海洋より本郷にと、感情は必然的なせりあげられ方をして居り、しかも地理的空間的効果の発展の仕方第一波と同じく、極めて有機的関係の一連をなして」おり、「しかもその四首は、第一波の四首とひとつひとつ呼応して、全体に第二波では、第一波よりも強調された心情表現となつて居り、この二回の大きな心情表現の波にのつて、妻子の心も一応殆ど望みなき絶叫にうちあげられ」「生死不明に迷ひつつ、あきらめながらも若干の望みを持つてゐて悶え」、「望みの綱は大半以上切れたことを自覚して、絶望感の中にある」。これに対して、「あと二首は、全構成から見ればいはば反歌として、絶望篇二首を加へたと見るべきである」と説かれた。

このように各歌が緊密に構成され、心情表現が展開されていると認められたのは、勿論個人の創作と考えられるからであり、作者を憶良と推定されてのことである。三波からなる構造を心情表現の展開と認められたのは新しい発展であるが、反論も寄せられた。

笠井清氏は「志賀白水郎歌十首の原形・原意の問題」（『万葉』

20、昭和31年7月)で、「この十首から得られてゐるイメージは原作そのものよりも遙かにすぐれたものらしく、そこに氏独自の美化と補修とが幾分加はつてはゐないであらうか」と指摘され、

釜田氏は「民族文芸学の立場とその限界——犬養氏の『筑前国志賀白水郎歌』論を駁す——」(『国語と国文学』昭和27年12月)で、

(1)「独自の心情表現論を展開し純粹個人文芸として眺める立場を固持され」ていること、(2)「当時の作者の心情表現を客観的に辿るといふよりも寧ろ歌を通して現在の氏自身の心情を表現してゐる」と思われること、(3)憶良による妻子の代作として「妻子の心に純化されてゐない、気持ちの上の不明瞭性」など矛盾や不純を指摘されるのは、憶良の他の代作(創作)には認められない点であるなどと指摘された。

他方、後に犬養孝氏の論を祖述し展開された川口常孝氏は、「憶良の長歌と連作——その民衆性について——」(『万葉作家の世界』昭和46年10月)で、犬養氏の構造論を修正され、歌群は①④の第一波(A)と⑤⑧の第二波(A)がいささかの矛盾もなく同行程をとって併行的に展開しつつその重層性を増して、⑨⑩の第三波(B)の絶望感へと落ちかかつて行くという意図的連作であり、さらに白水郎の去就を「王」との関連においてとらえ、これに客観的批判の声を放ちうるものが当時の地

方民衆のなかに存在したとは考えられず、憶良の創作とすべきことを強調された。

### 三 尼崎本朱注或本による構造論

構造論に一つの転機を与えたのが、尼崎本『万葉集』頭注の書き入れの評価にかかわる問題である。

現行本による構造論に疑義を提出されたのは澤瀉久孝氏の「志賀白水郎歌十首」(『万葉』18、昭和31年1月)であった。すでに武田祐吉氏が『万葉集全註釈』で尼崎本の頭注が伝える或本の配列に注意されたものの、注の指示する歌の配列順序に誤解があるとして、改めて澤瀉氏の見解を示されたものである。

尼崎本の書き入れは、③の「志賀の山いたくな伐りそ」(三八六二)の上に

本云 或本已下三首在上云々)

とあり、⑦の歌の右肩に

沖つ鳥鴨といふ船の帰り来ば (三八六六)

と移動させるべき符号が記されている。武田氏は「已下三首」を③以下の③⑤と解し、「在上」を①の前と考えて「( )」を

の符号を無視されたため三首を歌群の冒頭に移したが、「③④⑤／①②⑥⑦⑧⑨⑩」の配列に疑義を抱かれた。しかし、澤瀉氏は「已下三首」を④⑤⑥とし、「在上」を③の前と解することによって「」の移動符号にもかない、配列は「①②／④⑤⑥／③⑦⑧⑨⑩」となり、①②④と⑤⑥③の三首二聯の各歌が①と⑤、②と⑥、④と③と呼応し、つづく二首二聯の⑦と⑧、⑨と⑩がそれぞれ自問自答と理解することができると主張された。

これ以後は尼崎本に対する評価が不可欠となった。なお、澤瀉氏が考えられた尼崎本朱注或本による配列順序については、後に坂本信幸氏が詳しく論証されることになるが、その論には改めて触れることにする。

このように尼崎本朱注或本が再評価されてから、「或本」の配列についての賛否が論じられ、現行本の配列を肯定する説と尼崎本朱注或本を肯定する説とが展開されることになった。

構造論を最初に展開された笠井清氏は「志賀白水郎歌十首の原形・原意の問題」（『万葉』20、昭和31年7月）で、澤瀉氏の説に對して、尼崎本そのものは卷十六最古の写本で尊重すべき善本であるにしても、それに朱筆で書き入れた「或本」（これが原作者の自筆本であるというのであれば問題はないが、その証明は

ない）の配列が、尼崎本の本文および他の諸本の配列を変更しなくてはならない程の優位と權威をもつものであるのか疑問があり、「或本」は一異本として参考にすべき程度のものと位置づけられた。尼崎本と朱注の「或本」を同等に評価すべきかに疑義を示されたものである。

笠井氏はさらに現行本の配列と「或本」の配列を比較検討され、澤瀉氏のいわれる呼応関係は、(1)第一聯と第二聯との呼応と、第三聯と第四聯との呼応とでは、内容が全く違い、(2)第一聯と第二聯にあつては、第三聯と第四聯に見られるような各聯内での呼応は認められないなど、呼応の方法と内容が多様複雑で、このような煩瑣な構造をとりえたか疑問であることを指摘され、さらに、(3)現行本の配列における「荒雄ら」の語の位置に注目されて、初めの六首では、一首の中にある場合と一首の冒頭にある場合が交互に三度も繰り返されて進行しており、最後の一首で「志賀の荒雄」ともう一度打ち出して終結させているところに原作者（憶良と推定される）の主知的な構成上の技法（視覚的かつ聴覚的な効果）が見られることも、現行本の配列の妥当性として付け加えられた。

このような批判が寄せられた一方で、澤瀉氏の論を祖述され、さらに発展させられたのが稲岡耕二氏の「筑前国志賀白水郎歌



十首に就いて」(『万葉』80、昭和47年9月)であった。

稲岡氏は尼崎本の朱注が正しい本文を伝えていることを確かめられた上で、朱注の伝える或本も信憑性が高いと評価されて、その配列の順序に従って考えると、十首の構成そのものが現行本の配列よりも一段と鮮明になるとされつつ、しかし澤潟氏の説明はなお対応の真意を説明したことになるかとして、十首を①②④の三首と⑤⑥③⑦⑧⑨⑩の七首の前後二部からなる構造と見られた。冒頭三首の①②④は荒雄の帰りの予定期日を過ぎた時点に視座を据えたもので、帰らぬ荒雄を思う妻子の立場における歌であり、後の七首は「八歳」後に視座を置くものであること、同時に七首中の前部⑤⑥③の三首は、多年を経て殆ど絶望的な心情にありながら、なお荒雄のことを思つてやまぬ妻子の心を歌ったもので、冒頭の①②④三首と一首ずつ対応を意識しながら作られており、「八歳」後の絶望的な悲嘆を強調叙述していることが明らかである。冒頭歌①の「沖に袖振る」と⑤の「浪に袖振る」との相違も、時の相違と結びつけて解されるべきで、六首目までは時の経過に併行した感情の変化を表現している。つまり、「時の経過と妻子の悲嘆の深まりとが連作によつて浮き彫りになるように作られている」と説かれる。後部四首⑦⑧⑨⑩についても、⑤⑥③の後に位置することによつて、

もはや①②④と同一の時点にはありえず、これも「八歳」を経た後の感懐とすべきものであると説かれた。

このように、①と⑤、②と⑥、④と③、⑦と⑧、⑨と⑩と二首ずつ対となり、時の経過を含みつつ期待と絶望とが交互に詠まれるというような配列の十首は、志賀の漁労者の歌として見ることを拒む性質のもので、万葉集内の連作の在り方としても極めて珍しい複雑な構造と認められるから、相当に熟練した技術を要することは確かで、一人の歌人の手になるものと考えた場合、山上憶良が最も近い位置を占めていることも否定し難い、と憶良の創作と推定された。

#### 四 現行本による構造論の展開

尼崎本朱注或本とは別途に現行本の配列にもとづく論も進められた。

伊藤博氏は、「歌壇・上代」(『和歌文学講座』第三巻、昭和44年。後に「古代の歌壇」と改題『万葉集の表現と方法 上』昭和50年、所収)で、尼崎本朱注の或本が果たして原本の姿なのか疑問が残る、尼崎本が伝える一説として受けとる方が無難であり、現行本により「四首——四首——二首」の構成を考えられた犬養

氏説を穩当であるとされ、この構造は伴旅人の「讃酒歌」十三首とは無縁でなく、「白水郎歌」と「讃酒歌」にしか出てこない「さかしら」の語に注目されながら、「白水郎歌」は「讃酒歌」の最初の三首（序章）を欠いた形態と考えるのではないかと説かれた。

また、歌に関する左注（因縁）が附されているのは、十首が白水郎荒雄を悼む妻子の歌として語り伝えられたことを反映し、「或云……山上憶良臣云々」というのは、本当の作者（脚色者・編曲者）が憶良であったという伝えを留めたものと考えられた。

伊藤氏は、その制作の前後関係はともあれ、旅人の連作と関連的に憶良も連作をなしたところに意義を見ようとした。

倉野憲司氏は「筑前国志賀白水郎歌十首新解」（『文芸と思想』33、昭和45年1月）で、「筑前国志賀白水郎歌十首」は左注の如何にかかわらず十首が志賀の白水郎が詠んだ歌とする立場からの題詞であるとされ、現行本配列の十首は①～④・⑤～⑧・⑨⑩の3群からなり、①～④は荒雄の妻子の心で詠まれたが、志賀の白水郎たちの間に謡はれていた本の歌があり、それに憶良が手を加えたものと推測され、これに対応させて憶良が⑤～⑧を作ったと思われるが、妻子の心に十分なりきれないで、筑前守

山上憶良が露呈しているものの、①～④と⑤～⑧には荒雄の生存を期待し、ひたすら帰還を待つやさしくもあわれな心情が貫いており、締め括りの⑨⑩も憶良の作と思われ、ここではじめて荒雄の溺死・行方不明が暗示されている。この十首は「熊凝のためにその志を述ぶる歌に敬和する六首」（巻5・八八六～九一）と同様に、憶良が荒雄の妻子等のためにその志を述べたと見てよいと説かれた。

倉野氏は歌の解釈に新見を示されたが、十首の構造については犬養・福田両氏とほぼ同様の見解であり、作者については釜田喜三郎氏の一案と同様な考えに立たれた。

また、井手至氏は「筑前国志賀白水郎歌十首の構造」（『万葉集研究』11、昭和58年、後に『遊文録 万葉篇一』平成5年、所収）で、尼崎本朱注或本の評価を問わずに現行本によつて構造を考察するという態度を明らかにされた上で、十首の配列に終末歌の性格を有する③の歌で切れ目を考えられ、①～③の第一歌群と④～⑩の第二歌群からなる構造と見られた。③の歌の第四句「よすか」は「死者を思い偲ぶゆかりとなるものの意で、挽歌における用語であることが注意される」として、「この三首の中に、題詞にいうような、志賀の白水郎たちの間で誦詠された歌、民間土着の歌の面影を見いだしたい」とされ、①～③の第一歌群

は④以下の第二歌群と異なつて民間から採集された歌どもで構成された、第一次的に成立した歌群で、多少官人(憶良か)の修正が加わっているにしろ、志賀の白水郎たちの歌謡としての面影を伝えたものと推定された。それと④～⑩の第二歌群には、当事者ではない第三者のことば、つまり官人や他所者のことばと認められる表現が見出されるので、官人(憶良)が白水郎たちの立場に立つて作歌したものであるらしいと指摘された。

十首全体を見渡すと、第二歌群冒頭の④の歌が、第一歌群を括る③の歌を承けて接続し、以下の歌々が逐時的に、時間の経過や心情の推移変化に従い、順次直前の歌の内容を承けつつ展開し、⑩の歌がこれらを結ぶ形であり、全体的にはなほだ緊密な構造を巧みに形成しえていると評価された。

井手氏は、第一歌群三首が第一次的に民間から採用した志賀白水郎の歌謡に官人(憶良)の修正を想定され、第二歌群七首が官人(憶良)の白水郎たちの立場に立つての作歌と想定されて、構造においては新しい把握を見せられ、作者については釜田・福田両氏と同様な見方をとられた。

その後、笠井昇氏は「志賀白水郎歌試論」(『千里山文学論集』42、平成2年3月)で、巻十六における志賀白水郎歌群の位置への配慮と、作品そのものの内部を密に検証、考察することの必

要を主張され、十首の中で類句性を持つ歌などを関連的に丹念に検討されて、荒雄の妻子の悲しみを歌った①②に和して憶良が③④を歌ったか、あるいはまず核として③④を詠み、その抒情の質的共鳴から①②を配したかで、①～④の第一段落の成立を見、次に死への悲しみを離れて思想的共鳴から白水郎集団中の民衆の歌⑤⑥を配し、⑦⑧⑨は憶良自らの願望をも重ねて採集した妻子の歌あるいはその異伝歌を連ね、最後に自作の⑩で完結性を持たせて第2段落が成立したと想定された。構造の成立を考えるのに新たな観点を加えられて、①～④を第一段落、⑤～⑩を第二段落と見られ、作者については、①②は白水郎の妻子、③④は憶良、⑤⑥は白水郎集団における民衆、⑦⑧⑨は白水郎の妻子の歌あるいはその異伝歌、⑩は憶良というように、白水郎の妻子、白水郎集団、憶良にわたって推定された。

笠井昇氏は各歌の解釈を通じてその位置づけを探ることを基本に据え、構造の成立過程を考察されたものである。

## 五 「原形」十二首の構造論

尼崎本朱注或本を評価しながら、さらに論を発展されたのが渡瀬昌忠氏であった。渡瀬氏は昭和三十三年の第一論文以来長

年にわたって以下の論を発表された。

- ① 筑前国志賀白水郎歌十首の形成——伝誦歌との関係  
を中心に——  
『文学』昭和32年8月
- ② 山上憶良——志賀白水郎歌の周辺——  
『万葉の歌人たち』昭和49年
- ③ 志賀白水郎歌群——二つの現形の成立——  
『日本文学の伝統と歴史』昭和50年
- ④ 志賀白水郎歌の場——歌群の構造論として——  
『万葉』87、昭和50年3月
- ⑤ 香椎廟宮——志賀白水郎と旅人・憶良——  
『国文学』52、昭和50年9月
- ⑥ 志賀白水郎の風俗楽と憶良——文学以前——  
『上代文学』37、昭和51年4月
- ⑦ 筑前国志賀白水郎歌群  
『筑紫万葉の世界』平成6年

これらの論は『山上憶良 志賀白水郎歌群論』（平成6年）に収められているが、ここでは論の総体について触れることにする。渡瀬氏は題詞を「筑前の国の志賀の海人が謡っている歌十首」の意と解され、単純な憶良創作説とか民謡説を排され、最終的には憶良の手に成るが、荒雄に残された妻子等の立場に立って、

白水郎たちに謡われるように作歌したと推定される。

十首の配列について、渡瀬氏は十首の現行本における配列と、尼崎本朱注或本における配列を二つの「現形」として、これからさかのぼって想定される「原形」十二首の配列を

A ①②③④ B (4)⑤⑥(3) C ⑦⑧⑨⑩

と考えられた（「現形」の十首は、現行本ではB群からA群と重複する④③を省略し、尼崎本朱注或本ではA群からB群と重複する(3)(4)が脱落した結果と見られる）。この「原形」十二首の構造には、憶良が直接責任をもった香椎廟宮の祭祀で志賀白水郎が奉納した「風俗楽」の演奏形態であった四者構成の歌の座が反映されており、十二首を「白水郎男女が二列に相對している四者の歌の座を、三たびめぐり往復して謡われるように」憶良が作歌したと推定された。その様相は少々複雑なので、要約すると次の通りである。

A群①②③④の四首はすべて「荒雄」の語を有する。②③が妻の立場の歌であるのに夫を対称で「わが背子」「君」と呼ばず、客観的に「荒雄」というのは、「行きし」荒雄に残された者たちの「待ち」「偲ひ」「寂し」む嘆きを第三者が表現したからである。

B群(4)⑤⑥(3)の四首はA群の終わった時点から始まる。(4)は

④を反復し、⑤⑥はA群①②の変奏曲で⑥は「荒雄らは妻子が業をば思はずろ」と訴える。妻子の立場にたっているが第三者による表現で、「荒雄らは妻子が」は全き客観、「産業」は憶良の用語である。(3)はA③の再利用で、「見つづ偲はむ」の句はB群においては終末歌であることを意味する。この四首はこの順序でまとまった歌群でありえた。A群四首を受けて、さらにそれ以後の、荒雄を待ちつづける妻たちの嘆きと思慕とを歌いあげた新たな四首による歌群だった。万葉集巻十六の現存最古の写本尼崎本朱注が伝える「或本」は、このB群四首の歌群の存在を示していた。尼崎本の本文をはじめとする現行諸本の⑤⑥二首は、このB群四首からA群と重複する③④を省略したものにほかならない。

C群四首は二首ずつ二対の組合せから成る。⑦と⑧は現実の荒雄の生還を待つ者の、気強き者と気弱き者との唱和のように見える。⑨と⑩の「小船」は荒雄を尋ねて行く船である。A・B両群がすべて「荒雄ら」の語を有していたのに対して、C群はすべて「船」の語を有し、海のかなたの荒雄と志賀の白水郎をつなぐ役割をもつ。その海のかなたはすでに他界の色彩を濃厚に帯びている。「志賀の荒雄」が生還せず、他界の霊的存在となってしまうことを認めるに到る。

歌群による叙事はA群↓B群↓C群と進行するのであって、この配列順序は決して無意味ではない。「十首」(十二首のうち重複二首)の内容は、荒雄の妻子らの思慕と悲しみを第三者たる官人憶良が表現し、志賀白水郎が謡う荒雄鎮魂の歌たらしめようとしたと見るにふさわしい。この歌群の立場上の歌い手は筑前国の志賀島の白水郎の荒雄に残された妻子らであり、歌群の作り手は筑前国守の山上憶良であり、その謡い手は筑前国の志賀の白水郎たちなのであった。

渡瀬氏は、憶良が歌群の成立にかかわったのは荒雄の遭難にまつわるエピソードに悲哀と同情を覚えたことにあるが、その成立の契機に筑前国守憶良の管下にあった志賀白水郎の「風俗楽」を考えられた。歌群の中に志賀白水郎の風俗歌の混入を推定されたのは先に触れた福田氏であったが、渡瀬氏はその直接的な混入は否定されるものの、「風俗楽」を志賀白水郎歌群の成立に不可欠な要因とみられたのである。

渡瀬氏の論は民衆性を帯びた歌群の構成をどう理解すべきかという課題に対して、志賀白水郎の風俗楽との関連や、筑前国守憶良がどのようにかわったかを考慮されながら、諸関係をトータルに把握できる姿として「原形」十二首(現行諸本の本文と尼崎本朱注或本の歌順を残すことになった)の構造を想定

されたのであった。しかし、最近公表された『広瀬本万葉集』（定家筆本転写本）の志賀白水郎歌十首は現行諸本の本文と同じで、残念ながら尼崎本朱注或本に相当する本文は見出せず、また尼崎本朱注と同様の書入れもない（注1）。

## 六 構造否定の論

上に見てきた諸論は志賀白水郎歌十首に何らかの構造を認めるのに対して、中西進氏は「志賀白水郎歌」（『万葉集研究』1、昭和47年、後に『山上憶良』昭和48年、所収）および「山上憶良——志賀白水郎歌十首の再検討——」（『万葉歌人論——その問題点をさぐる』昭和62年3月）で、歌群の配列に構造は認められず、また現形をそのまま憶良の作とは考えられないと主張された。尼崎本の③の頭注「已下三首在上」について、「在上」とは冒頭①の前を指し、これに「已下三首」と移動の符号（③を⑥の次へと解されて）を併せ考えると、③④⑤⑥の四首が①の前にあり、③を⑥の次に戻したというプロセスが推定され、その結果を記したのが尼崎本で、ここに推定される「或本」の配列順序は

(3)④⑤⑥①②⑦⑧⑨⑩ ↓ ④⑤⑥(3)①②⑦⑧⑨⑩

といわれる。

しかし尼崎本朱注或本を復原したとしても、現行諸本にとつては書き入れの一本にすぎず、この関係は逆にも言いうることで、二群の原資料の採取方法の違いによる結果であるが、このことも志賀白水郎歌十首の配列に構造を認めがたい根拠とされる。

十首のうち、②はすでに存在した白水郎の歌、①③④⑥は憶良の作、⑦⑧⑩は集団歌と見られ、尼崎本朱注或本の配列に呼応・対応を見る説に対して、各歌の関係については次の如く否定的に見られる。

①と⑤について、①の「大君の遣さなくに」と⑤の「官こそさしても遣らめ」は自然に変化することはありえず、民衆の口ぶりではなく、官僚の立場を想像させ、「或云」により憶良に結びつけざるをえないが、①の「沖に袖振る」を⑤の「波に袖振る」とありきたりな「波に」におきかえたところに伝誦性が認められ、①と⑤は異伝の関係と見る。

②と⑥について、②は具体性生活性を持ち、他とまったく異質で、憶良は他者の経験を歌う作家ではあったが、このように葬送の民俗にまで深入りしていない。⑥の時間は勿論、「妻子が業」という観念的大局的な把握は官人のもので、「業」は第三者

の表現できわめて憶良的であり、作歌の場、視点、作者に大きな相違がある。②と⑥は全体が「待てど来まさ」ぬことを主題とするもので、そこに反復が見られる。

④と③について、仮に①と⑤及び②と⑥に対応があるとして、それと等しい対応を④と③には認められないのは、情況が違出し、歌いぶりもまったく似てないからである。④の「志賀の白水郎の大浦田沼はさぶしくもあるか」も③の「荒雄らがよすがの山と見つしのはむ」もよそよそしく抒情的で、痛恨の中にある当事者にはもつと激越な痛みがあつたはずで、万一これら十首が白水郎集団のものであつたとしても、少なくとも「不勝憤慕」妻子の作ではない。

⑦と⑩の四首にはそれぞれ対応が認められる。⑦と⑧が初句をひとしくし(上句の景物が共通なのは原初的な歌謡形式)、「早く告げこそ」「聞こえ来ぬかも」が照応するのは謡いもののゆえであり、荒雄が沖の島(他界)から鴨に姿をかえ、鴨という船にのつて帰ってくることを人々は幻視し願望したのではないのか。

⑨と⑩については、⑨が井村哲夫氏のいわれる精霊船「赤ら小船」(注2)に裏を託して沖の死者に送る白水郎の習俗によるであろうし、⑩の「大船に小舟引き添へ潜く」のも死者慰撫の

祭事(死者との邂逅を願う模擬の儀礼としての)ではなかったか。このように解される四首は、前半六首とは別の場をもつて成立している。

このように分析された結果、作者は二分した考えの上に、出されねばならないだろうとされて、第一、第三、六首の五首は確実に憶良の作歌に属し、第二首および後半四首について、第二首はすでに存在した白水郎の歌で、憶良がこれに第六首を唱和することによって、後半四首がこの一群に組み入れられたものではないかと推定され、十首がいかに民謡性をもっている、それは憶良の「民衆とともに在る」性質なのかもしれないし、伝誦歌謡の一般性に対して、特定年次の特定個人の事件は、民謡の世界ではまったくあい容れないものではないか、と考えられ、「しかし一方、にもかかわらず十首における民謡性は払拭し得ない。この十首こそ、無名者集団の〈民〉の世界に半ば溶解しようとする作家像を、古代歌人としての山上憶良が示すものだった」と述べられた。

こうして、中西氏は十首に文芸的な構成意図などないといわれる。

中西氏が尼崎本朱注或本の配列順序を想定される中で、③を④⑤⑥とともに一旦①の前に移行させてから、さらに⑥の後に

移行させた」と推定された点については、尼崎本の朱筆注記者が、③を再度配置換えしたプロセスまで記すことはあるのか、私の理解はそこまで至らない。対校した「或本」の配列の事実を注記するのが最もあり得る態度ではないかと思われるからである。

林田正男氏もまた「志賀白水郎歌十首」（『万葉集を学ぶ』7、昭和53年10月、後に『万葉集筑紫歌の論』昭和58年、所収）で、志賀白水郎歌群の構造に関する従来の諸説を詳細に検討された結果、「十首は緻密で複雑なしかも整然と趣向をこらした構成を有する完成体として捉えてよいが、そこには憶良がそれを成したという解答が用意されているにもかかわらず、なお疑念が残る。また、たとえば尼崎本朱注が伝える或本が、仮に原本の姿であるとすれば、現行本文による諸説の対応関係に揺らぎが来ることは確かである。順序が確定にいたらなければ構成論でもあるまい。この十首に対しては連作的構成を有すると即断することなく、原点に立ちもどり考えるべきではなからうか」と尼崎本朱注或本の評価が不確定であるゆえに慎重である。

## 七 尼崎本朱注或本の位置づけ

尼崎本朱注或本の配列順序は、頭注書き入れ「已下三首在上」の「已下三首」と「在上」および移行を示す符号をどう理解するかにかかっており、武田祐吉氏と澤瀉久孝氏の二通りのとらえ方があって、武田氏説を継承されたのが深萱和男・高橋庄次・両氏（注3）であり、澤瀉氏説を継承発展されたのが稲岡耕二・渡瀬昌忠両氏であった。この頭注書き入れをどう解釈すべきかを問い直されたのが坂本信幸氏である。

坂本氏は「志賀白水郎歌十首の尼崎本書き入れについて」（『奈良女子大学文学部研究年報』34、平成2年）で、尼崎本の書き入れは③の本文の上にあるが、次の二行の訓を除外した本文だけで考えるべきだとされ、また尼崎本の注記者が「已下」を基準を含まないで使用する（つまり次行以下を指す）例証として、三八一五番歌左注最後の行「彼歌報送以頭改適之縁」の上に書き入れた「已下雑哥也」が明白に次の歌の三八一六番からを指している事実をあげられ、③の頭注の「已下三首」は、直下にある③の本文の次行である④から⑥までの三首を指すと指摘された。『類聚古集』に同様の例が二例見られるように写本に一般的な符号で、③の歌が⑥の歌の次



に位置することを意味しており、「已下三首在上」の「在上」をあきらかにするために、③が⑥の次に入ること示したものと考えられた。この論によって澤瀉氏の主張された尼崎本朱注或本の配列順序が妥当であることが確認されたといえよう。

しかし坂本氏は、尼崎本の或本は書き入れの一本に過ぎないものであつてみれば、或本の配列順序が原本に近いとも言えず、現存古写本諸本（現行本）の配列を原本のものと考えるのが順当であり、尼崎本朱注或本の配列は、原本の配列に到る段階のものか、原本に手を加えたものの何れでしかないと考えられ、或本の配列が他には伝わっていないことから「原本が形成される前の段階」を考えるのが穏当であろうとされる。その場合、原本編者は、(a)尼崎本朱注或本と同じ配列の資料から第六首目をわざわざ第三首目に移動させて、現行本の配列の歌群を編んだことになるか、もしくは(b)既に尼崎本朱注或本と同じ配列の資料と現行本と同じ配列の資料との二群があった中から、後者を選び原本を編纂したことになると考えられ、氏はその理由を構成上の問題として追求された。

坂本氏は「原本が形成される前の段階」の一資料としての或本に沿って考えられ、(1)第一首①から第六首③までの六首と、残る四首とは切れが存する。(2)前の六首には①と⑤、②と⑥、

④と③という対応がある。(3)第六首③は「見つづ偲はむ」という万葉集において終末歌に用いられる傾向を持つ句を有し、一次的に終末歌であつた可能性が高い。(4)残る四首には⑦と⑧、⑨と⑩という対応関係がある。(5)尼崎本朱注或本の配列の成立には、六首一組からなる歌群と、四首一組からなる歌群が存在したことにならないか。時と場を異にする二組みの作品があり、そのまま志賀白水郎歌十首として一つの題詞下に一緒にして配列したのが「尼崎本或本」ではなかったか、などを指摘された。そして、現行本の成立について、現行本編者（もしくは現行本資料作者）は、③を④⑤⑥の前に入れ替えて現行の①②⑩に手直した。おそらく対応の異なる二組みの歌群を一つの題詞の下に纏めるのに、断絶が少ないようにまとめ上げる工夫だったのでないか。わずか③を④の前に入れ替えることにより、全体がそれほど切れがなく統一になるからであると考えられ、かかる現行本の配列は全体が二首ずつのリズムを持っていとされ、かつて笠井清氏が十首は五聯の構成で各聯は問答（或は呼応）によって形成されていると述べられたことを肯定的に見られた。

尼崎本朱注の「或本」は、現在のところ同一の本文が他に全く見出されないという点では孤立的であり、坂本氏がこれを現

行本と同じ本文の原本成立の前段階的資料と推定されたのは充分に考えうることであるが、その資料が現行本編者（もしくは現行本資料作者）によって現行本文のように手直しされたと見るのか、考えられる可能性の一つとして今後の検討がまたれる想定であろう。

## 八 おわりに

構造論に限っても、笠井清氏の論以来、ほとんどの論者が志賀白水郎歌十首の配列に、表現意図に沿う文学的な構造を探ってこられた。その構造論も、十首についての解釈も微細な点で賛意と異見が交錯し、また各歌の間に見られる呼応関係や連携のしかたについての認定も多様である。その結果として、

(a) 二首五聯（笠井清・坂本両氏）

(b) 前聯四首・後聯六首（釜田・笠井昇両氏）

(c) 第一連〔波〕四首・第二連〔波〕四首・第三連〔波〕

二首（犬養・福田・倉野・川口諸氏）

(d) 第一次三首・第二次七首（井手氏）

と四通りが説かれ、澤瀉久孝氏の論によって尼崎本朱注或本が問題になってからは、さらに、

(e) 第一聯三首・第二聯三首・第三聯四首（澤瀉氏）

(f) 前部六首・後部四首（稲岡氏）

という見方が示されるなど、その論点は(1)或本と現行本のいずれの配列が文学的構造として合目的とみられるか、に移ったばかりでなく、(2)渡瀬昌忠氏の論のように、或本と現行本が示唆する原構造はいかなるものであったかが探られて、男女の詠者各二群四者によって構成される歌の場を反映する原形十二首の構造として、

(g) A群四首・B群四首・C群四首（渡瀬氏）

とA群からC群へ繰り返し誦詠される形態が想定されるに至った。

その一方で、こうした文学的な構造を否定的に見られる中西進・林田正男両氏の発言には、十首の解釈と各歌間の関係の認定のしかたになお検討を要するという指摘が含まれていることも忘れられるべきではあるまい。

尼崎本朱注或本の存在によって、文学的な構造の論議から、さらに十首の配列の成立に関する考察へと論点が広げられ、(3)中西氏は或本と現行本の異なる配列の成立過程を推定され、さらに坂本信幸氏は資料編纂の過程を想定されるに至っている。このような研究史的な展望は、当然論文の中で前提とされる

はずの作業である。だが、「筑前国志賀白水郎歌十首」については、その構造論に絞ってもこのように諸見解は多様であり、尼崎本朱注或本の存在が注目されてさらに複雑多岐にわたり、論文の一節では到底整理しきれものではないので、問題点の確認のために小稿を綴った。

それにしても志賀白水郎歌群に関する論文は多く(注4)、ここでは構造以外の問題についてとりあげた諸論文は割愛させていただいたが、構造を論じられた論文でも見ることができずに非礼を冒している場合が少なくないと思われるので、機会を見てさらに補わなければならないと思っている。

(注1) 拙稿「渡瀬昌忠博士著『山上憶良 志賀白水郎歌群論』」

(『万葉』第一五五号、平成七年十一月)

(注2) 井村哲夫氏「赤ら小船——志賀白水郎歌私注——」

(『森脇一夫博士古稀記念論文集 万葉の発想』昭和52年。後に『赤ら小船 万葉作家作品論』昭和61年、所収)

(注3) 深萱和男氏説は口頭発表で、久米常民氏「憶良文学に於ける歌謡性」(『万葉集研究』5、昭和51年。後に『万

葉歌謡論』昭和54年、所収) に紹介された。

高橋庄次氏「志賀白水郎歌十首の復元とその構造」(『芭蕉連作詩篇の研究』昭和54年)

(注4) 広岡義隆氏が「志賀白水郎の歌十首」(『万葉集研究入門ハンドブック』平成六年) におびただしい論文を紹介しておられる。

Chikuzen-no-kuni Shika-no-ama Songs  
(Songs of the Shika-fishermen in Chikuzen)  
— An overview of studies on the construction  
of the Shika-no-ama Songs —

IZURU MURAYAMA

SUMMARY

Songs of the Shika fishermen (“Shika-no-ama”) in Chikuzen tell of how a fisherman named Arao was lost at sea at the beginning of the Jinki Era (724~9) and of the subsequent grief of his family.

It is debated whether the writer of the songs was the poet Yamanoue Okura or a member of the family of the fisherman Arao. It is further argued whether the songs can be considered to have a literary construction. Finally, in the Amagasaki-bon version of the Manyoshu, there is mention of another source (“one book”), the importance of which is contested, in which the Shika-no-ama songs appear in a different version.

In this paper, I give an overview of these issues and of the various theories surrounding the Shika-no-ama songs.